巻 頭 言

# 「ゆめ」について思う

ガラス産業連合会　運営委員会委員長（日本板硝子）
**阿 部　友 昭**

今年の 6 月から，前任の野原委員長の後を受けて，ガラス産業連合会（GIC）運営委員長をつとめさせて頂くことになりました。不慣れではありますが精一杯努めさせて頂く所存であり，皆様のご協力をお願い申し上げる次第です。

数号前の本誌の巻頭言に，GIC 技術委員会の田中鐵二委員長が「2025 年ガラスの旅」と題して，非常に興味深い「ゆめ」を語っておられる。この「ゆめ」の内容は，業界団体人として，企業人として，そしてまた技術者として，深い洞察力に基づく明るい希望に満ちたものである。ガラス産業連合会の発足，ガラス産業技術戦略 2025 年の策定，ナノガラス国家プロジェクトの開始など，大きなトピックスがあったここ数年こそ，まさに「ゆめ」を語る絶好の機会であったとも思われる。このゆめが実現できるかどうかは，我々及び後輩達の頑張り次第であるわけだが，私は，ゆめを持つこと自体が非常に重要と考えている。ゆめとは単なる予想ではなく，こうありたいと願う自らの意志が入るものである。それがあればこそ，現在なすべきことを明確化し，どのような状況においても萎縮することなく主体的に行動することができる。

昨今の我々を取り巻く環境は非常に厳しい。昨年以降だけを見ても，IT 不況に始まり，米国での同時多発テロ，そしてアフガン戦争，更には不祥事による企業経営自体への不信感，雇用情勢の悪化など，明るい話題が本当に少ない。それらの様々な要因でついに日経平均株価は 9000 円を割る水準にまで到達してしまった（この原稿を執筆しているのは 9 月 8 日であるが，本誌が発行される 12 月には回復していることを願う）。いわゆるバブル期と呼ばれる 80 年代後半から 90 年代初頭に現在の状況を予想していた人は殆どいないだろう。このような時期であるからこそ，冷静な現状分析，今後の戦略策定（魅力があり且つ頑張れば実現できる計画）が必要である。ニューガラスフォーラムが中心になって策定されたガラス産業技術戦略 2025 年は，まさに我々の所属するガラス業界の戦略そのものである。また，国レベルでいうと産業競争力戦略会議にて我が国の競争力強化のための戦略を検討されている。経済産業省の方々も，「失われた 90 年代」とか「死の

谷克服」とか，使われる用語を見ただけでも相当な危機感をもって臨んでおられるということがひしひしと感じられる。産業の空洞化の問題が提起されて久しいが，今こそ，産学官が連携して，ユニークな研究技術開発を行い，グローバルな視点で我が国が生き残り繁栄していくことが必要であると痛感する。

国家においても企業においても，現在たてている戦略が正しかったかそうでないかは，後世の歴史家に判断を委ねるしかない。しかし現時点でも確率論的な判断は可能である。すべてを過去の延長で考え，新機軸を入れないのは良くない。また，過去を全く無視して独りよがりの考えで進めるのも悪い。過去の歴史と現在状況の類似点と相違点を明確にし，論理的に考えていけば，自ずと目指す道は決まっていくはずである。勿論，ある程度のリスクテイクは必要である。そして，もう一つ大切なのは，そこにゆめと希望をちりばめることであると考える。昨日たまたま見ていたテレビで，「日本を誇りに思う点は何か？」というアンケートを街を歩く若者を対象に行っていた。結果は，1 位が「食べ物がおいしい」で，2 位が「治安が良い」ということであった。回答の格調が高いかどうかは別にして（ちなみに 3 位は「お米があること」だった）少なくとも現時点では，彼らは安全で比較的快適な生活ができていると感じ，それを誇りにしているという事であろうか。我々の責務は日本をそういった社会にするとともに，それを継続的に実現できる，或いはそれにふさわしい後輩・子孫を育てていくことだろう。その意味では私自身もまだまだ勉強が必要だと感じている。諸外国の人々に対して，そしてまた我々の子孫に対して，誇れる国でありたいものである。